

今、足下を見つめ、固めることの重要性

西 穰 司

現在、小・中学校等では、来年度からの新学習指導要領に基づく教育課程の本格実施をはじめとして、種々の学校改革への取組みに余念のないところであろう。また、高等教育機関においても、大学評価の具体的施策がいよいよ実施に移される段階を迎えており、筆者もその一員として周囲からの強力かつ相当厳しい改革要請に緊張感を抱きつつ、なんとか新たな展望を拓きたいものと模索しているところである。

たしかに、1990年代以降いっそう加速化してきた大規模な社会変化の波の勢いを考慮すると、これまでの学校制度の基本的枠組みや実践方策の相当思い切った改革・修正が不可欠と考えられる。

ただ、非常に残念なのは、国レベルでの一連の教育改革方針や施策が公的審議機関等から矢継ぎ早に出され、そうした「外部から」、ないし「上から」の要請に対し、各教育機関（学校）がともかくも応えねばならないとして、足下の日々の生徒の学習状況や学校経営の実情とは懸け離れた、いわば皮相的な対応に流されてしまうおそれが強いことである。

わが国においては、これまでも制度の枠組みや基本的施策の改革の流れが、各学校の門にまでは到達しても、現実の教育活動が展開されている教室の中にまで深く浸透し、好ましい変化をもたらさなかった嫌いがある。

もう、このような愚を繰り返してはなるまい。われわれは、教育機関に在職し、教育の事実責任を担う立場から、わが校や自身の日々の実践を冷静に点検しつつ、21世紀社会にふさわしい学校像を丁寧にかつ忍耐強く追求したいものである。このたびの平成の一連の教育改革が、真に有効かつ適切に展開されるか否かは、結局のところ、われわれ教育機関に勤務する当事者の双肩にかかっていることを深く銘記したいと考える。

幸い、このたびの教育改革の基本方向は、各学校の自主性・自律性の確立が重要な指標とされており、われわれ各学校の当事者側の創意工夫や努力が実を結びやすい条件が整ってきていると思われる。その意味では、まさに各学校の諸条件や個別的課題に適合した教育経営の創意性が大いに尊重される時代が到来したと前向きに受け止め、明るい教育の未来を開拓してゆきたいものである。